

第十六回酒都で聴く居囃子の会 《白鷹緑水苑開苑 20 周年記念》

特別出演：文楽人形 吉田和生（人間国宝）

安宅

勸進帳・延年之舞・貝立貝付

令和 3 年 10 月 23 日（土）

会場 白鷹緑水苑 宮水ホール

午後 14：30 開演

2001 年に灘の酒文化を発信する文化施設としてオープンした白鷹緑水苑は、今年で 20 周年を迎えることとなりました。この間、芸能に縁の深い「酒の町」西宮より、今に生きる伝統芸能を発信しようという試みに取り組んでまいりましたが、そのひとつとして、2006 年より西宮在住の能楽師の方々を中心として毎年開催しているのが「居囃子の会」です。居囃子とは、能を着座のまま囃子と謡で演ずる演能形式ですが、動きがない簡素化された上演形式のため、かえって純粋に謡と囃子の魅力をダイレクトにお伝えすることができるのではないかと思います、この企画をスタートしました。第 16 回目となる今回は、歌舞伎十八番や文楽でおなじみの「勸進帳」の元となった「安宅」を取り上げ、特別出演として、文楽人形の人間国宝、吉田和生師にも弁慶でご登場いただき、緑水苑開苑 20 周年記念公演とさせていただきます。

今回の「安宅」には「勸進帳」「延年之舞」「貝立貝付」という小書がありますが、これらを含み、安宅には随所に聴きどころがあります。まず「貝立貝付」は、山伏に身をやつした義経一行が、危険と知りながらも堂々と安宅の関へ向かってゆく様を強調する特殊演出で、強力に扮する狂言方が、ホラ貝をふく様を擬音で表現します。次に弁慶一行による勤行の場面があります。富樫の疑念が晴れない中、弁慶一行が、成敗される前の最後のお勤めとして殊勝げに祈祷を始めるのですが、最後には逆に、生き仏ともいえる山伏を手にかけるとは、たちまち天罰がくだるだろうと、ものすごい剣幕で凄んできます。ここでは「ノット」といわれる、鼓が力強い独特のリズムを刻む中、一行が山伏の謂れを語りながら祈祷を行います。文楽と歌舞伎ではここから展開して、疑念をもった富樫による、修験道の知識を試そうとした問いに対し、弁慶が山伏の装束のいわれなどについて巧みに答える、いわゆる「山伏問答」という、緊迫した場面が別に後に登場します。

これに続く、「勸進帳」の場面では、朗々と勸進帳を読み上げる弁慶と鼓の絶妙なせめぎ

合いがさらに緊迫感を高めます。この〔勸進帳〕の謡は、七五調を基調とするリズムに漢文を読み下した文章を当てはめてゆくため、リズムの取り方が難しく、緩急を自在に扱った上で役の心情も表現しなければならないことから、シテ方、小鼓方いずれからも極めて重い扱いを受け、大切にされてきたものです。

この後一行が辛くも関所を通過すると一転、義経の悲劇をじっくりと語り聞かせるしみじみとした場面となります。義経が自らの果報の拙さを嘆く「クセ」の部分は、歌舞伎や文楽には無い部分ですが、義経の末路を知る我々にとっては胸に迫るものがあります。「兄頼朝の命に捧げた、闘いの連続の半生。海山に寝起きし、鎧を枕にする日々。そんな忠勤も今となっては甲斐無きこと」緊迫感あふれる全体の展開からは、趣の異なる部分ではありますが、「判官びいき」という言葉があるように、当時の人々の間にも義経の悲劇への強い共感があったことがうかがわれます。通常能「安宅」の上演でも省かれることが多いのですが、今回はじっくりとお聞きいただきました。

この後再び富樫が迫ってきて先ほどの非礼を詫び、酒をすすめます。弁慶は座興に延年の舞を舞い、心を許さず暇を告げ、一行をせきたてて出発します。「延年の舞」は、中世の寺院において流行した芸能の一種で、これを専門的に演じる芸に熟達した僧のことを「遊僧」と呼びました。詞章の中に「もとより弁慶は三塔（比叡山延暦寺の異称）の遊僧」とあるように、比叡山きっての芸達者であった弁慶が舞う勇壮な舞の場面で物語は最高潮に達します。

今回は吉田和生師が遣う弁慶が、関所を無事通過した後の場面から登場し、主君の悲運を嘆く様子を見せ、最後は能の囃子にあわせて「延年之舞」を舞うという、居囃子の会ならではの特別企画でお愉しみいただきました。この間、文楽には無い「クセ」の部分（クセは囃子と謡のみに焦点をあててじっくりとお聴きいただきました）、を除き、随所に能と文楽で同様の詞章が登場します。文楽「勸進帳」とは異なる間合いをとる弁慶の所作を通じて、能と文楽の語りや音楽性の違いが浮き彫りとなったのではないかと思います。

「安宅」に先立つ前半の第一部では、能にはない「山伏問答」の丁々発止の場面を講談で、また、義経と弁慶が主従の契りを結ぶきっかけとなったエピソードを能「橋弁慶」から、鼓と謡の独鼓でお聴きいただきました。冒頭は祝言の「三番三 初之段」の躍動感あふれる舞で幕を開け、最後は、長寿や平和を祈念する芸能に起源をおく「延年之舞」で舞い納める今年の居囃子の会。疫病退散、国土安寧の願いを込めてお届けしました。

主催：「西宮発・今、伝統芸能」実行委員会 共催：白鷹緑水苑

後援：西宮市・西宮観光協会・公益財団法人 兵庫県芸術文化協会

プログラム

狂言舞 「三番三 初之段」

舞	善竹隆平
笛	斉藤敦
小鼓	久田舜一郎
大鼓	守家由訓

講談 「勸進帳」 旭堂小南陵

独鼓 「橋弁慶」

謡	寺澤幸祐
小鼓	久田陽春子

休憩 ドリンクサービス

番囃子「安宅」 一能と文楽人形よるー

シテ（武蔵坊弁慶）	梅若基徳
ワキ（富樫）	寺澤幸祐
子方（源義経）	浅見悠花
間 （強力）	善竹隆司
間 （太刀持）	善竹隆平
同山・地謡	上田宜照
同山・地謡	上田顕崇
同山・地謡	梅若雄一郎
同山・地謡	寺澤拓海
地謡（地頭）	上田拓司

笛	斉藤敦
小鼓	久田舜一郎
大鼓	守家由訓

特別出演

人形（武蔵坊弁慶）	吉田和生〈人間国宝〉	吉田玉佳	吉田和馬
-----------	------------	------	------



